HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コメ消費の食卓分析 ： コメはどのような家庭で消費されているのか
Author(s)	鈴木, 充夫
Citation	フロンティア農業経済研究, 15(1), 84-92
Issue Date	2010-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62520
Type	journal article
File Information	KJ00006717872.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〔フロンティア農業経済研究　第15巻第1号　2010.2〕

［報告論文］

コメ消費の食卓分析

—コメはどのような家庭で消費されているのか—

東京農業大学国際食料情報学部　**鈴木　充夫**

An Analysis of Rice Consumption: The Types of Households that Consume More Rice

Mitsuo Suzuki
Tokyo University of Agriculture

Summary

This article examines the situation of rice consumption in Japanese families in 2006. The goal of this article is to examine (1) the frequency of rice consumption at the breakfast, lunch and dinner tables; (2) the characteristics of the households that serve more rice for breakfast, for lunch or for dinner.

A canonical correlation analysis was adopted to examine the data. The data was obtained from "The Database of Food Expenditure in Japanese Households" that NTT Data Lifescape Marketing Corporation has been collecting since 1998.

The following two conclusions were reached:

1. Rice was served most frequently for dinner, then for lunch, and least frequently for breakfast.
2. Households with full-time working mothers tend to serve rice at breakfast. Households with non-full-time working mothers, with elderly persons, and households with high health awareness tend to serve rice for dinner.

Ⅰ　課題

従来のコメ消費関連の研究では総務庁の家計調査を用いた年齢別消費量の分析が中心であった。たとえば、森島［1］は、総務庁の『家計調査』の個票データを利用した年齢別消費量の重回帰分析を用い、年齢層が高いほどコメの消費量が増加する傾向があることを指摘した。石橋［2］は同じ総務庁『家計調査』の個票データを用い年齢区分ごとの一人あたりコメの消費量を計算し森島と同じ結果を得ている。また、上岡・清水［3］は、JA全中等のアンケート調査を利用して、森島と同様の重回帰モデルを用い農家の年齢別コメ消費量を推計した。その結果、農家の年齢別コメ消費量についても森島、石橋と同様の結果を得ている。また、松田・中村［4］は、総務庁『家計調査年報』の世帯主年齢階層別一人当りコメ消費量を用い、ベイズ型コウホート・モデルを適用しコメ消費量の年齢効果、時代効果、コウホート効果を分離し、コメ消費量の減少は時代効果によるところが大きいと指摘した。

我が国の1世帯あたり年間コメの消費量（うるち米ともち米の合計）は、家計調査年報によれば、1985年の157.1kgから1995年の106.4kg、2005年の89.5kgと一貫して減少している。このコメ消費量の減少には、核家族化、食生活の西洋化などの影響があると言われているが、いまだ、十分な解明はなされていない。その背景には、核家族化や食生活の西洋化などをあらわす消費関連データが存在していなかったこ

とがあげられる。本研究で取り上げる㈱ＮＴＴデータライフスケープマーケティングの食MAPデータは、食卓単位の食品総合データベースであり、蓄積されたデータには、モニターの家族属性と食生活意識が含まれている。本研究では、この食MAPデータを活用して

① 朝食・昼食・夕食の食卓においてコメがどのような頻度で登場するのか？

② 朝食・昼食・夕食の食卓においてコメを多く登場させている世帯はいかなる特徴があるのか？

を分析する。分析対象期間は2006年1月から12月までである。

Ⅱ 利用データと分析方法

1. 利用データ

本稿で用いる食MAPデータとはMarket Analysis and Planningの頭文字をとったもので、「食卓」で消費される様々な食品のデータベースである。このデータは、1998年10月から㈱ＮＴＴデータライフスケープマーケティングが独自にモニターを持ち、収集したデータであり、従来のPOSデータ（誰が何を買ったか）とは異なり、「誰が何を買い、どのような食事に利用したか」の情報を食卓段階で把握することができる。このデータを活用することにより、今までのデータからでは読み取れなかった「食卓での食品選択行動」を陽表的に扱え、従来の消費者行動処理分析では知ることのできなかった「潜在的ニーズ」を拾い上げることが可能になった。食MAPデータは、この食卓段階での隠れたニーズを導き出す手法として、現在、食品製造メーカーを始め、卸・小売業者に注目され始めている[注1)]。

1) 食MAPデータとは

食MAPデータのモニターは、首都圏在住（東京30ｋｍ圏内：東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県）の有配偶2人以上世帯の主婦（年齢は抽出時に決定）であり、偶数月の2、4、6、8、10、12月の年6回に20名～40名を募集し、年360サンプルを割らないように募集人数を調整している。

抽出方法は層化二段階無作為抽出法であり、以下に示す手順でモニターが抽出される。

① 募集地域のゼンリン住宅地図を参考に抽出するページ数を決定する。抽出ページ数は、自治体発表の総世帯数をゼンリン住宅地図ページ数で割り決定する。

② 抽出ページと丁目をランダムに決定する。

③ 決定した丁目の番地内で等間隔に世帯を抽出し、抽出した世帯にモニター募集葉書を送付する[注2)]。

サンプル数は1998年10月の120世帯、1999年10月の240世帯、2001年10月の300世帯、2002年2月以降は360世帯が稼動中である。

データの収集項目は、①購買 ②在庫 ③イベント ④食卓 ⑤モニター属性である。

① 購買とは、購買した際の詳細情報についてである。購入店舗・購入商品名・購入数量・購入日の情報を収集している。

② 在庫とは、購入した商品の使用状況についてである。購入から使用開始までの未使用期間・使いきりまでの使用期間とその使用回数の情報を収集している。

③ イベントとは、その食卓を囲んだ際の日常のイベントについてである。日、曜日、平日と休日・生活イベント（来客等）・天候・気温などについての情報を収集している。

④ 食卓とは、その食卓を囲んだ際の詳細情報についてである。メニュー（約1000分類）・材料（約2000分類）・食卓機会（朝・昼・夕など）・飲食者・食卓人気・メニュー人気・食卓動機についての情報を収集している。

⑤ モニター属性とは、モニターの年齢・職業・年収・学歴・家族構成・ライフステージ・住居形態・居住地域・出身地・海外旅行経験・食生活

表1　食MAPのメニューデータの例（夕食：2006年1月1日～12月31日）

モニタID	全メニュー計	穀物合計	ご飯類	餅	パン・トースト	うどん・ソバ	スパゲティー等	ラーメン等	ビーフン	軽食類	
4002	1,368	271	227	0	1	4	23	12	1	3	
モニタID	ご飯類合計	ご飯	おこわ	寿司	丼	おにぎり	お茶漬け	カレー	オムライス	チャーハン等	ちまき弁当等
4002	227	124	0	28	50	0	0	15	0	1	9

資料：食 MAP データより集計。

意識・生活価値観などについての情報を収集している。

2)　データセット

本論では、2006年1月1日から12月31日までの毎日の朝食・昼食･夕食のメニューデータから1世帯ごとに朝食・昼食・夕食において、ご飯類、パン・トースト類等、その他がそれぞれ何回食卓に登場したのか、その回数を1年間集計した分析用データベースを作成した。モニター数は194世帯である[注3)]。表1に、参考のために、夕食のデータベースの一部を示してある[注4)]。

この表を元に、食MAPのデータの読み方を簡単に説明する。4002番のモニターの世帯では、2006年の1年間の夕食に、ご飯類が227回登場し、ご飯類のうち124回にご飯(白米、玄米ご飯、麦・胚芽米ご飯、あわ・ひえご飯、かけご飯、まぜご飯、炊き込みご飯、イカめし)[注5)]が食卓にのっていたことを示している。

このデータベースからモニターごとに、1年間の朝食・昼食・夕食において、ご飯類、パン・トースト類等の穀物合計に占める割合とご飯類のうちのご飯の占める割合を求め、分析用データベースを作成した。また、ご飯を多く登場させている世帯はいかなる特徴があるのかを把握するために、①モニター属性（長子の就学状況、末子の就学状況、家族形態、家族人数、主人出身地、主人職業、主人年齢、主婦出身地、主婦就業状況、主婦年齢、世帯収入）と②モニター食生活意識調査（安全志向、栄養バランス志向、外食志向、健康志向、料理好き志向）のデータも利用している。

2. 分析方法

本論で採用した正準相関分析とは変量群の関係を調べる手法である。変量群の関係を調べる手法としては重回帰分析が一般的であるが、重回帰分析は1つの目的変数と複数の説明変数との相関を最大にする分析手法であるのに対し、正準相関分析は目的変数を複数にした分析手法である。また、合成変量の分散を最大にする主成分分析は、合成変量の相関係数を最大にする正準相関分析に含まれる（奥野他［6］を参照）。以下、本論で採用した正準相関分析のモデルを説明する。

今、主食割合（X）、モニター属性（Y）、モニター食生活意識調査（Z）の3つ変量群があるとする。Xの主食割合には、ご飯類の穀物合計に占める割合（X_1：4）、パン・トースト類の穀物合計に占める割合（X_2：4）、ご飯類のうちのご飯の占める割合（X_3：4）の3変数[注6)]が、Yのモニター属性には、長子の就学状況（Y_1：4）、末子の就学状況（Y_2：4）、家族形態（Y_3：6）、家族人数（Y_4：5）、主人出身地（Y_5：10）、主人職業（Y_6：5）、主人年齢（Y_7：6）、主婦出身地（Y_8：10）、主婦就業状況（Y_9：6）、主婦年齢（Y_{10}：6）、世帯収入（Y_{11}：6）の11変数[注7)]が、Zのモニター食生活意識には、安全志向（Z_1：2）、栄養バランス志向（Z_2：2）、外食志向（Z_3：2）、健康志向（Z_4：2）、料理

好き志向（Z_5：2）の5変数[注8)]がある。なお、これらの変数はすべてカテゴリーデータであり、（　）内の数字はカテゴリー数である。

なお、このとき、

それぞれの合成変量（正準変量）を、

$X = a_1 + b_1X_1 + c_1X_2 + d_1X_3$

$Y = a_2 + b_2Y_1 + c_2Y_2 + d_2Y_3 + e_2Y_4 + f_2Y_5 + g_2Y_6 + h_2Y_7 + i_2Y_8 + j_2Y_9 + k_2Y_{10} + l_2Y_{11}$

$Z = a_3 + b_3Z_1 + c_3Z_2 + d_3Z_3 + e_3Z_4 + f_3Z_5$

と表したときに、XとY、YとZ、ZとXにおけるそれぞれの相関係数を最大にする定数、a_1、b_1、c_1・・・e_3、f_3を求めることが正準相関分析の骨子である。

XとY、Zの相関係数を最大にする正準変量が決まれば、互いの変量群を比較することが可能になる。たとえば、正準変量XでX1が、YでY4、Y5、Y6が、ZでZ2の説明力が高ければ、正準変量X、Y、Zが、それぞれの変数、X1、Y4、Y5、Y6、Z2と関係が高いことを間接的に示すことができる。この性質を使い課題に接近する。

注1）「クリスマスにはチキン」が一般的な食文化であると考えられているが、食MAPデータを分析するとクリスマスの食卓にはピザの登場回数が多い、また、母の日には「花をプレゼントする文化」が定着しているが、同じ母の日には「アイスクリーム」が食卓に登場しており、「花とアイスクリーム」が新しい文化になる可能性がある。これらの分析結果は斉藤〔5〕に紹介されている。

注2）2005年5月までは、①募集地域の自治体に行き住民基本台帳を閲覧、②住民基本台帳よりランダムに募集モニターを決定、③決定した募集モニターへ案内ハガキを送付する住民台帳層化二段階無作為抽出法であったが、住民基本台帳の閲覧が困難になったために2005年6月からは徐々に本文のサンプリング方法に変更した。

注3）サンプル総数は360世帯であるが、2006年1月～2006年12月の1年間継続してデータを記録していたモニター世帯は194世帯であった。なお、モニター主婦の年齢別割合は、20歳代5.2%、30歳代31.4%、40歳代27.8%、50歳代29.9%、60歳代は5.7%となっている。

注4）原データは、モニターごとに2006年1月1日から12月31日までの1年間365日のメニューデータ(約1000分類)からなっており、この原データをAccessを利用し抽出し、表1のように1年間分を集計した。

注5）ここで、麦・胚芽米ご飯は麦、胚芽米、栄養強化米のご飯のことを、あわ・ひえご飯は白米を混ぜたものを、かけご飯は卵かけご飯、ふりかけご飯、そぼろかけご飯、とろろかけご飯等のことを、まぜご飯はわかめご飯、じゃこご飯、青菜ご飯、しそご飯等のことを、炊き込みご飯は釜飯、豆ご飯、竹の子ご飯、かやくご飯、栗ご飯、松茸ご飯等のことを含んでいる。

注6）たとえば、ご飯類の穀物合計に占める割合（X_1）では、20%未満が1、20%以上40%未満が2、40%以上60%未満が3、60%以上が4、パン・トースト類（X_2）では、30%未満が1、30%以上60%未満が2、60%以上90%未満が3、90%以上が4、ご飯類のうちのご飯（X_3）では、25%未満が1、25%以上60%未満が2、60%以上85%未満が3、85%以上が4である。

注7）たとえば、長子の就学状況（Y_1）については、子供無が1、子供有（長子乳幼児）が2、子供有（長子小・中学校）が3、子供有（長子高校生以上）が4などである。

注8）たとえば、安全志向については、安全志向プラスが1、安全志向マイナスが2などである。

Ⅲ　予備的分析

表2はご飯類、パン類とご飯&ご飯の1年間の出現回数と割合を示したものである[注1)]。

表2は、2006年1月1日から12月31日までのご飯類、ご飯&ご飯、パン類及びその他の1年間の出現回数と割合を示したものである。たとえば、朝食の食卓に穀物類を登場させた回数は82,905回あり、そのうちの31.4%にあたる26,010回はご飯類が、59.7%にあたる49,459回はパン類が食卓に載っていることを示している。また、ご飯類のうちの67.0%がご飯を食卓に載せていることを示している。この表より、朝食ではご飯類が31.4%、パン類が59.7%、昼食ではご飯類が41.8%、そばなどのその他穀物が40.4%、また、夕食ではご飯類が81.9%、食卓にのっていることが確認できる[注2)]。これらの割合から判断すると、同じ食事であっても。朝、昼、夕では食卓の選択行動が異なっていることが予想される。

注1）ご飯類には、ご飯、おこわ、寿司、丼、おにぎり、お茶漬け、カレー、オムライス、チャーハン・そば飯、ちまき弁当等が含まれ、パン類には、食パン、バターロール、イングリッシュマフィン、クロワッサン、フランスパン、レーズンパン、蒸しパン、ナン、その他のパン、トースト、ピザトースト、マヨネーズトースト、フレンチトースト、その他のトーストが含まれ、その他の穀物には、餅、うどん・ソバ、スパゲティー等、ラーメン（ヤキソバ）、ビーフン、軽食類（ピザ等）が含まれ、ご飯&ご飯には、白米、玄米ご飯、麦・胚芽米ご飯、あわ・ひえご飯、かけご飯、まぜご飯、炊き込みご飯、イカめしが含まれる。

注2）JA総合研究所の「米の消費行動に関する調査結果」〔7〕によれば、主食別の食数の割合は、朝食でお米が主食と答えた割合が47.2%、昼食では58.9%、夕食では82.5%となっている。このアンケート調査の数値は食MAPの数値と若干異なっているが、これはJAのアンケートには男性・女性の単身者が含まれているのが原因の一つであると考えられる。しかし、両者とも朝食⇒昼食⇒夕食の順にお米の割合が高くなっている点では一致している。

Ⅳ　計測結果

表3は正準相関分析の結果を示したものである。正準相関分析では主成分分析と同じように固有値問題を

表2　ご飯類、パン類とご飯&ご飯の1年間の出現回数と割合（モニター数194）

		穀物合計	ご飯類	うちご飯	パン類	その他
朝食	（実数）	82,905	26,010	17,423	49,459	7,436
	（割合）		31.4%	67.0%	59.7%	9.0%
（1家族1日当たり）		1.17	0.37	0.25	0.70	0.11
昼食	（実数）	48,153	20,151	8,369	8,554	19,448
	（割合）		41.8%	41.5%	17.8%	40.4%
（1家族1日当たり）		0.68	0.28	0.12	0.12	0.27
夕食	（実数）	62,899	51,534	37,629	1,965	9,400
	（割合）		81.9%	73.0%	3.1%	14.9%
（1家族1日当たり）		0.89	0.73	0.53	0.03	0.13
3食計	（実数）	193,957	97,695	63,421	59,978	36,284
	（割合）		50.4%	64.9%	30.9%	18.7%
（1家族1日当たり）		2.74	1.38	0.90	0.85	0.51

資料：食MAPデータより集計。

註：ご飯類、パン類、その他の割合はいずれも穀物合計に占める割合であり、ご飯&ご飯の割合は、ご飯類に占めるご飯の割合である。

解いて固有値を求めるが、通常、複数の固有値が得られる。その固有値に対応して正準変量も複数存在し、1番大きな固有値に対応する正準変量を第1正準変量と呼び、以下、２番目に大きな固有値に対応する正準変量を第2正準変量と呼ばれる。表3は第1正準変量の結果のみを示してある。これは、第2正準変量については妥当な解釈が得られなかったためである。
この表から分析結果を朝食、昼食、夕食ごとにまとめれば次のようになる。

1. 朝食

主食割合の3変数で合成された第1正準変量Xはパン類と0.787、ご飯類と-0.553の相関を示しており、第1正準変量Xは「朝食のパン化」を示す変量と考えられる。モニター属性の11変数で合成された第1正準変量Yは主婦出身地と-0.373、主婦就業状況と-0.321とマイナスの相関を、主人出身地と0.250、家族形態と0.224、家族人数と0.222のプラスの相関をもっており、第1正準変量Yは「主婦属性と家族規模」を示す変量と考えられる。モニター食生活意識の5変数で合成された第1正準変量Zは栄養バランスと-0.528とマイナスの相関を示しており、第1正準変量Zは「栄養志向」を示す変量と考えられる。

この結果から朝食においてパンかご飯を選択する食卓行動は、「主婦属性と家族規模」、および、「栄養志向」が関係していると考えられる。

表4は朝食に登場するご飯類の割合をキーに、主婦の就業状況、家族形態、および栄養バランスをクロス集計した結果である。この表から、主婦がフルタイムで勤めている世帯ほど朝食にご飯類を食べている割合が多いこと、栄養バランスにあまりこだわっていない世帯でご飯類が多いこと、また、夫婦1世代世帯でご飯類の割合が多いことが確認できる。

2. 昼食

主食割合の3変数で合成された第1正準変量Xは、パン類と-0.491、ご飯類と-0.454とマイナスの相関を

表3　正準相関分析の結果

	朝　食 第１正準変量	昼　食 第１正準変量	夕　食 第１正準変量
固有値	0.592	0.581	0.580
正準相関係数	0.773	0.762	0.762
ご飯類	−0.553	−0.454	0.246
パン類	0.787	−0.491	0.226
ご飯&ご飯	−0.073	0.138	−0.702
長子の就学	0.117	−0.268	−0.016
末子の就学	0.115	0.207	0.049
家族形態	0.224	−0.047	−0.021
家族人数	0.222	−0.231	−0.159
主人出身地	0.250	0.126	0.347
主人職業	0.089	−0.092	−0.117
主人年齢	0.138	0.406	0.281
主婦出身地	−0.373	−0.423	−0.203
主婦就業状況	−0.321	−0.410	0.313
主婦年齢	−0.062	0.461	0.419
世帯収入	−0.018	−0.044	−0.035
安全志向	−0.015	−0.045	−0.359
栄養バランス	−0.528	0.087	−0.072
外食志向	−0.116	0.517	0.354
健康志向	0.121	−0.139	−0.397
料理好き	0.141	−0.267	−0.376

資料：食 MAP データより計算。

示しており、昼食をご飯とパンに分解する変量として合成されていない。モニター属性の11変数で合成された第1正準変量Yは主婦年齢0.461、主人年齢0.406がプラス、主婦出身地-0.423　と主婦就業状況-0.410とがマイナスの相関をもっており、第1正準変量Yは「年齢と主婦属性」を示す変量と考えられる。モニター食生活意識の5変数で合成された第1正準変量Zは外食志向と0.517　プラスの相関を示しており、第1正準変量Zは「外食志向」を示す変量と考えられる。この結果から、昼食においては、第1正準変量Xはパンあるいはご飯を示す変量となっていないことから、昼食にパン類、あるいは、ご飯類を選択する時に、属性や食生活意識の明確な特徴は見られず、年齢と主婦属性、および、外食志向の強さによって、ある時はご飯、ある時はパンを食卓に登場させていると考えられる。

3. 夕食

主食割合の3変数で合成された第1正準変量Xはご飯＆ご飯と-0.702の相関を示しており、第1正準変量Xは「夕食のご飯化」を示す変量と考えられる。モニター属性の11変数で合成された第1正準変量Yは主婦年齢0.419、主人出身地が0.347、主婦の就業状況が0.313、主人年齢0.281とプラスの相関をもっており、第1正準変量Yは「年齢と主婦就業状況」を示す変量と考えられる。モニター食生活意識の5変数で合成された第1正準変量Zは外食志向と0.354のプラスの相関を示しており、健康-0.397、安全-0.359、料理-0.376のマイナスの相関を示しており、第1正準変量Zは「食の安全・安心志向」を示す変量と考えられる。この結果から、夕食においては、ご飯を選択する食卓行動は、「年齢と主婦就業状況」、および、「食の安全・安心志向」が関係していると考えられる。

表5は夕食に登場するご飯類の割合をキーに、主婦の年齢、主婦の就業状況、および、健康志向、料理好き、安全志向、栄養バランスをクロス集計した結果である。この表から、主婦の年齢が50歳、60歳代の世帯ほど夕食にご飯類を登場させていることがわかる[注1)]、また、朝食とは逆に、主婦がフルタイムで勤めている世帯ほど夕食にご飯類を食べている割合が低いことが確認できる。また、健康、安全、料理好きの世帯、および、朝食とは逆に、栄養バランスにこだわっている世帯でご飯類が多いことが確認できる。

表4　クロス集計の結果（主婦就業状況・栄養バランス・家族形態）

ご飯の出現割合	全体	勤め人（フルタイム）	勤め人（パート・アルバイト）	専業主婦	自営業・自由業	家族従業者	その他	栄養バランスプラス	栄養バランスマイナス
20%未満	37.6	20.0	30.9	39.1	62.5	0.0	66.7	42.2	10.7
20%以上40%未満	26.8	10.0	32.7	28.2	12.5	0.0	11.1	25.3	35.7
40%以上60%未満	14.9	10.0	20.0	12.7	0.0	100.0	11.1	15.1	14.3
60%以上	20.6	60.0	16.4	20.0	25.0	0.0	11.1	17.5	39.3

ご飯の出現割合	全体	１世代世帯（夫５０歳未満で夫婦だけ）	１世代世帯（夫５０歳以上で夫婦だけ）	２世代世帯（子供と同居）	２世代世帯（親と同居）	３世代世帯（子供、親と同居）	その他世帯
20%未満	37.6	53.3	30.4	35.9	50.0	54.5	0.0
20%以上40%未満	26.8	6.7	26.1	28.9	50.0	27.3	0.0
40%以上60%未満	14.9	13.3	13.0	15.5	0.0	9.1	100.0
60%以上	20.6	26.7	30.4	19.7	0.0	9.1	0.0

資料：食MAPデータよりクロス集計。

註：ご飯類の出現割合は１世帯の１年間の朝食に出した穀物合計に占めるご飯類の割合であり、%の値が大きいほど、ご飯類の出現頻度が高いことを示している。

注1）ご飯類の出現割合と主婦と主人の年齢のクロス集計結果では、朝食を除けば、年齢が高くなるにつれご飯類が食卓に登場する割合が高くなる傾向が読み取れる。これは、森島［1］、石橋［2］、上岡・清水［3］の結果と整合している。

V　結論及び課題

2006年1月1日から12月31日までの食MAPデータを用いた1年間のご飯類、パン類等の出現回数と割合から、朝食ではパン類（出現割合：59.7%）が、昼食ではそばなどのその他穀物（同：40.4%）が、また、夕食ではご飯類(同：81.9%)が食卓に多く載っていることが確認できた。これは、同じ食卓でも朝食、昼食、夕食では消費者の食卓選択行動が異なっていることを示すものである。この点を確認するために正準相関分析を実施した。その結果、朝食では、主婦がフルタイムで勤めている世帯、夫婦1世代世帯でご飯類を食卓に登場させている割合が高いのに対し、夕食では、主婦がフルタイムで勤めている世帯ほどご飯類が食卓には登場しないことが示された。これは、仕事をもっている主婦は朝食をしっかり摂らなければ一日中働けないとの意識が、また、夕食には仕事のために帰宅時間が確定していないなどの要因が影響しているものと思われる。また、夕食では、主婦の年齢が50歳、60歳代の世帯ほどご飯類を食べていることが分かる。食生活の意識については、あわただしい朝には栄養バランスにこだわった朝食をとる傾向は少ないが、時間的に余裕がある夕食では、栄養、健康、安全にこだわっている世帯でご飯類が多いことが示された。以上のように、同じ世帯でも朝食、昼食、夕食の食卓における主食の選択行動は、世帯状況や食生活意識によって異なることが明らかになった。

しかし、本稿の結論はあくまで2006年の食MAPデータを用いた限定的なものである。食MAPデータは1998年から存在しているので、今後は食卓におけるコメの消費行動が時系列的に変化してきているのかを方法論も含め検討することが課題である。また、1998年からのモニターの意識調査も活用できるので、消費者の食に対する意識の違いが食卓における消費行動にいかなる影響を与えているのかについても分析する予定である。

表5　クロス集計の結果（主婦年齢・就業状況・健康、料理、安全、栄養志向）

ご飯類の出現割合	全体	２０歳代	３０歳代	４０歳代	５０歳代	60歳代	全体	勤め人（フルタイム）	勤め人（パート・アルバイト）	専業主婦	自営業・自由業	家族従業者	その他
20%未満	23.7	30.0	32.8	16.7	22.4	9.1	23.7	50.0	25.5	20.0	37.5	0.0	22.2
20%以上40%未満	29.4	30.0	31.1	48.1	13.8	9.1	29.4	20.0	32.7	30.9	25.0	50.0	0.0
40%以上60%未満	36.1	30.0	29.5	27.8	46.6	63.6	36.1	30.0	34.5	35.5	25.0	50.0	66.7
60%以上	10.8	10.0	6.6	7.4	17.2	18.2	10.8	0.0	7.3	13.6	12.5	0.0	11.1

ご飯類の出現割合	全体	健康志向プラス	健康志向マイナス	料理好きプラス	料理好きマイナス	安全志向プラス	安全志向マイナス	栄養バランスプラス	栄養バランスマイナス
20%未満	23.7	23.9	23.6	22.2	26.5	23.4	24.5	22.3	32.1
20%以上40%未満	29.4	29.5	29.2	27.8	32.4	26.9	36.7	27.1	42.9
40%以上60%未満	36.1	33.0	38.7	39.7	29.4	37.2	32.7	38.6	21.4
60%以上	10.8	13.6	8.5	10.3	11.8	12.4	6.1	12.0	3.6

資料：食MAPデータよりクロス集計。

註：ご飯類の出現割合は1世帯の1年間の夕食に出した穀物合計に占めるご飯類の割合であり、%の値が大きいほど、ご飯類の出現頻度が高いことを示している。

付記

本論文は、平成18年から20年度科学研究費補助金(基盤研究（B）「コメ市場の自由化に向けた生産対応と政策設計のための計量経済学的研究」、課題番号18380136、代表：清水昂一)の成果の一部である。

引用文献

[1] 森島賢「世代別の米需要分析」崎浦誠治編『米の経済分析』、農林統計協会、1984年、pp.129-138。

[2] 石橋貴美子「年齢階級別消費量の推計―『家計調査』個票データを使用してー」森宏編『食料消費のコウホート分析―年齢・世代・時代』、専修大学出版局、2001年、pp.187-217。

[3] 上岡美保・清水昂一「近年における農家世帯員の米消費量推計」清水昂一、小林弘明、金田憲和編著『コメ経済と国際環境』、東京農大出版会、2005年、pp.79-95。

[4] 松田友義・中村隆「世帯年齢階層別米消費量変化の分析」『農業経済研究』第64巻4号、1993年、pp.213-220。

[5] 齋藤隆『ニッポンの食卓の新・常識』、日経BP社、2005年、pp.102-107、pp.143-147。

[6] 奥野忠一、芳賀敏郎、久米均、吉沢正『多変量解析法』、日科技連、1971年、pp.373-384。

[7] JA総合研究所『米の消費行動に関する調査結果』、p.8、2008年。

(2008年11月13日受理)